

近代日本におけるケンペルの読まれ方

大島 明秀（歴史学）

はじめに

これまで「鎖国」言説の形成史を解明するために、元禄三〜五年（一六九〇〜九二）に来日したドイツ人医師・博物学者ケンペル（Engelbert Kaempfer, 1651-1716）によって著された日本の対外関係に関する論文¹の成立過程と、その日欧における受容について追究してきた²。

ところで、上記論文を所収したケンペル『日本誌』³（一七二七）は大部の書物であり、その内容は、最初にシヤム旅行、最後に江戸参府記の二章があるものの、日本の社会・歴史、宗教、起源、地理、鉱石、動物、植物などの項目を立てて論じた総合的な研究であった⁴。

また、ケンペルの生前に刊行された唯一の著書『廻国奇観』⁵（一七二二）は、主にペルシャ、インド、日本の植物、医学、薬学などについて記された文献であったが、この本についても十八世紀後半から十九世紀前半の日本で読まれていたことは、既に明らかにされている⁶。

したがって日本におけるケンペル著書の受容は、志筑忠

雄（一七六〇〜一八〇六）訳「鎖国論」写本（一八〇一）の読書（ならびに「鎖国」言説の形成）にとどまるものはなかった。

よって、本稿では主に近代日本を視座として、ケンペルをめぐる読書の多様性と、そこから見える日本の「近代」について書き連ねてみたい。

一 博物的知識の典拠

近世後期におけるケンペルの受容は、志筑忠雄訳「鎖国論」を通じたものがその大半であったが、一部の訳述書に、植物やその他博物的知識に関する情報源の典拠とされた形跡も認められる。

文化八年（一八一））、天文方は幕命を受けて、多くの学者を巻き込みながら、リヨンの主任司祭シヨメル（Zooel Chomel, 1632-1712）が著した日用百科事典⁷の訳出事業を開始した。事業は実に三十年以上かけて取り組まれ、その成果は大部の写本「厚生新編」⁸として編まれた。

その至る箇所において、ケンペルの名が挙げられている。具体的には、樟脳⁹、土茯苓¹⁰（サルトリイバラの根茎）、阿魏¹¹、動物の卵巢¹²、楮と和紙¹³、避雷法¹⁴、香木¹⁵などの項目の情報源として引用されている。その際、『日本誌』のみならず、「アムーニタテス¹⁶」、「アムーニタテス エキソキウム¹⁷」すなわち『廻国奇観』の名

ていたことは、既に明らかにされている。
したがって日本におけるケンペル著書の受容は、志筑忠

も確認できることに留意すべきである。いずれにせよ、ここでケンペルが植物を中心とした博物的知識の情報源となつていることが分かる。

ただし、「厚生新編」が世に出回ることではなく、その情報
報の流布は、幕閣、一部の大名家、ならびに翻訳従事者間
に留まり、一般に共有されることはなかった。

幕末・近代の植物学者として名高い伊藤圭介（一八〇三
〜一九〇一）は、ツェンペリー（Carl Peter Thunberg, 1743-
1828）の『日本植物誌』¹⁸（一七八四）を訳述した『泰西
本草名疏』¹⁹（一八二九）を上梓した。

伊藤はその「題言」において、日本の産物を西洋に紹介
した学者の一人としてケンペルの名を挙げながら、その中
で最も充実した成果を残した人物であると評価する²⁰。
本書は版本として刊行されたので、ここに描かれたケンペ
ル像は、或る一定の範囲に広まったことが推察される。

二 近代におけるケンペル著書の出版

近代日本においては、とりわけ「鎖国」という言葉のみ
が独り歩きしたこともあり、拙著では「鎖国」という言葉
の広まり、ならびに「鎖国」に関する議論の在り方や歴史
的眼差しを中心に確認した。しかしながら、明治以降にお
いても、依然としてケンペルとその著書は大いに利用され
たようである²¹。

ニタテス エキソキウム¹⁷ すなわち『廻国奇観』の名



図1 ケンペルの將軍綱吉との謁見にまつわる
小話を紹介した横山又次郎『世界の反響』
（早稲田大学出版部、一九二五年）。

ここで明治・大正年間のケンペル著書の翻訳を見ておく
と、まず明治一三年（一八八〇）内閣修史局の命を受けて
坪井信良（一八二三〜一九〇四）がケンペル『日本誌』の
全訳である写本「検夫爾日本誌」を完成させた。しかし、
この仕事が出版されることはなかった。
続いて島田壯介が、近世日本の対外関係を総体的に論じ
た『日本誌』第四巻を抄訳し、『日本古代商業史』（一八八七）

と名付けて上梓した。明治二四年（一八九一）から大正年間にかけては、「鎖国論」および『異人恐怖傳』²²が相次いで刊行された²³（表1）。

表1 近代におけるケンペルの邦訳史
 （『「鎖国」という言説』表2 [p. 64] を改訂）

成立年	著者・訳者・編者	題名	備考
明治13年 (1880)	坪井信良編	檢夫爾日本誌	写本。内閣修史局の命を受け <i>De beschryving van Japan</i> を全訳
明治20年 (1887)	島田壯介	日本古代商業史	活版。 <i>The History of Japan</i> 第四巻の抄訳
明治24年 (1891)	中野柳圃訳； 内藤耻叟校訂	鎖国論（『少年必読日本文庫』第五編所収）	活版
大正3年 (1914)	中野柳圃訳； 黒沢翁満校訂	異人恐怖伝（『文明源流叢書』第三巻所収）	活版
大正5年 (1916)	極西檢夫爾	異人恐怖伝（『婦足かむろ』所収）	活版
大正6年 (1917)	中野柳圃訳； 黒沢翁満校訂	異人恐怖伝（『日本国粹全書』第二四輯所収）	活版

三 日本の優秀性を説く「西洋人」の文献

ケンペルの描いた古い情報が、明治・大正期に頻繁に出版された理由については定かではないが、その答えに至る手掛かりが、明治一四年（一八八一）に上梓された『教道大意導之棗』に〈発見〉できるように思われる。

本書は、当時教導職（権少教正）であった久米幹文（一八二八〜一八九四）が、「偏ニ寒貧初学ノ徒²⁴」を対象として、「神道ノ淵源国体ノ縁由²⁵」を教導するために記したものである。

その巻二付録では『日本誌』が紹介されているが、その際、引かれているのは全体ではなく「鎖国論」であり、加えて、訳者ではなく「西洋人」である「ケンペル」が記した点に重点が置かれている²⁶。これは近世後期における平田派国学者の受容と全く同様の様相を呈している²⁷。

ケンペルハ西洋万里外ノ人ナガラ我國体ヲ洞察シ從來ノ衆論ヲ破シテ如此マデ公論ヲ尽セルハ千古ノ卓見ト云フヘシ今時西洋人ノ漫ニ自賛シテ他ヲ貶スノ比ニ非ズ但此書ヲ記ルハ元禄年間ノ事ニシテ鎖国ノ時ナル故ニ今ノ目ヲ以テ見レハ少シク不審ク思フメレトモ当時ノ形勢大約此書ニ云ルガ如クナルコトヨク古今ノ時勢ヲ考ヘテ反復翫味セハ必ス感激発明スル所アラム²⁸

表 1

成立
明治1 (1868)
明治2 (1869)
明治2 (1869)
大正 (1912)
大正 (1912)
大正 (1912)

この発言によれば、ケンペルの情報が古く、「今ノ目ヲ以テ見レハ少シク不審ク思フ」ことは久米も十分に認識しているようであるが、それでも「ヨク古今ノ時勢ヲ考ヘテ反復翫味セハ必ス感激發明スル所」があるだろうと強調している。

久米の意図は、「西洋人」ケンペルが賛美した過去の日本の素晴らしさ、万国に秀でた優秀性を読者に「理解」させること、ならびにその日本と現在との繋がりを「発見」させることであらう。

それは渡辺脩二郎『外交通商史談』（東陽堂、一八九七年）および大日本文明協会編・発行『欧米人之日本観』上編（一九〇八年）においても確認でき、いずれも日本賛美や日本の優位性を説く文脈でケンペルを用いている。



図2 『教道大意導之棗』表紙

ヲ考ヘテ反復翫味セハ必ス感激發明スル所アラム²⁸

四 日本人種（起源）論の情報源

ケンペルは『日本誌』第一巻において、二章を割いて日本人の起源について論じている。まず一つは、ケンペルが考えた旧約聖書に基づくバビロン起源説であり、いま一つは日本人自身が有していた起源観を採録したものである。

それまで一般的に日本人の起源は中国に由来すると考えられていたが、ケンペルは語学的検証および地理学的検証をもつて従来の説を覆し、ヨーロッパで初めて日本人をバビロンから直接至った民族であると断言する画期的な見解を提示したのである²⁹。ヨーロッパで『日本誌』が受容されるに伴い³⁰、この日本の起源に関する見解も受容され、議論を巻き起こした³¹。

十九世紀中葉に大部の日本研究書『日本』³²（一八三二～一八五一）を編んだシーボルト（Philipp Franz von Siebold, 1796-1866）の次男ハインリッヒ（Heinrich von Siebold, 1852-1908）は、日本の先住民族をアイヌに求めたことで周知されるが、彼が編集した『日本』一八九七年再版³³には父シーボルトの論文「日本人の起源について」³⁴が収録されている。

内容は、主に日中両言語の語学的考証に基づいた、日本人が中国に由来すると考える昔ながらの西洋の学説に対する批判であり、さらに「私にはこのような日本への中国人の植民定住は信じられない。このことについては、私は全

くケンペルの証明と意見に賛同する³⁵」との発言も確認できる。このようにケンペルの日本起源説はシーボルトにまで影響を及ぼしていた³⁶。

ところで、明治一七年（一八八四）、東京大学在学中の坪井正五郎（一八六三—一九一三）は、研究会「じんるいがくのも」を結成し、その二年後に「東京人類学会」に名称を変更するとともに、機関誌『人類学会報告』を発行した。事実上、ここに日本初の人類学会が誕生した³⁷。

坪井は、日本の先住民族をコロボツクルに求めたことで知られるが、その『人類学会報告』第二号において「抜萃日本人論集」を寄稿し、その中でケンペルのバビロン起源説を引いている³⁸。なお、本文中の「某省の命を奉じて家父が訳述せしケンフル氏日本誌³⁹」という言葉から分かるように、坪井正五郎は、内閣修史局の命を受けて『日本誌』の全訳「検夫爾日本誌」を成した上記坪井信良の息子であった。

我邦人は何人種に属す可きものなるや、純粹なるや、混交せるや、特に此地に興りしや、他所より移りしや等の間に答へんには体格、言語、旧習、古物等の研究必要なるは勿論なれど今日に於て我々が我邦人種に就きて有する知識は如何程迄に進歩せしかを知るも亦欠く可からざること信ず、故に内外学者の

論説にして此事に亘るものあらば新古を問はず得るに随て大意を記載せんとす⁴⁰

坪井によれば、日本人種の起源を究明するためには日本人種論の「進歩」（変遷史）を知ること必要であり、そのため古今東西にわたる日本人種論の大意の収録を意図したのだという。

また、古代や紋章に関する歴史著作を遺した沼田頼輔（一八六七—一九〇三）の『日本人種新論』（一九〇三）にもケンペルのバビロン起源説が紹介されている。

以上ケンペルの説を概括するときは日本人は支那より分派せしものにあらずして、特別の本源人に、多少支那、および、高麗、その他、付近国民を混入せしものなるべしといふにあり。この説たる大体に於いて、其の当を得たるものなりといへども、其の起源地を以つて、バビロンとなし、殊に、其の南端伊勢に移住することを解して、殖民を好むが故に、後人のこれに倣ふを恐れて、西濱を去りしといふが如きは、寧、兎戯に侷しきものといふべし⁴¹

沼田は、日本の先住民族に関するケンペルの見解については評価しながらも、一方で起源地と移動をめぐる考察に

種に就きて有する知識は如何程迄に進歩せしかを知らるも亦欠く可からざることと信ず、故に内外学者の

ついでは一蹴している。



図3 『日本人種新論』表紙

以上のように、ケンペルのバビロン起源説は明治から数えて百五十年以上前に出版された〈古い〉説であるにもかかわらず、近代日本における日本起源をめぐる言論の中に、時折登場していたことが認められるのである。

おわりに

読書したテキストをどのように解釈し、用いるか。その営為には、その時点の読者・利用者が抱えるアイデンティティが深く反映される。そのような意味合いにおいて、本

沼田は、日本の外信員が「日本」の歴史を「日本」の歴史として評価しながらも、一方で起源地と移動をめぐる考察に

稿の狙いは、「ケンペルがどのように読まれたか」という読書事実の把握にとどまらず、それを通して「近代（日本人）とは何か」の一端を探ることもあった。

これまで論じてきたように、近世後期および近代日本において、ケンペル著書はその読者の時点から百年から百五十年ほど遡る古い情報であるにもかかわらず、多様な用途で読まれた⁴²。近代に生じた新たな利用法として日本起源論の典拠とされる動きが認められる一方で、近世後期における志筑忠雄訳「鎖国論」の受容状況と同じく、相変わらず日本の優秀性を説く外国文献（典拠）として持ち出されることも確認できた。このことは、「断絶」のみをもつて語られがちな日本の近世・近代間のアイデンティティに、「断絶」と「連続」が並存していることを示している。

ここにおいて、「近世」、「近代」という括りによって、多くのことが見えるようになった一方で、これらの括りでは、或いはこれらの括りによって「見えない」、「見えなくなっている」ものが存在することは明らかである。

私たちの歴史観の基盤を形成する諸概念の不完全性が可視化されつつある今、歴史学は、その歩みを振り返り、現在の歴史観を構築するあらゆる概念の再点検を必要とする地点に来ているのではないだろうか。

注

- 1 原文はそもそもラテン語で著された『廻国奇観』
(*Amoenitates Exoticae*, 1712) 第二卷第十四章の論
文 *Regnum Japoniae optima ratione, ab egressu civium, &*
exterarum gentium ingressu & communionem, clausum. (「日
本王国が最良の見識によって自国民の出国および外国
人の入国、交易を禁じていること」)であり、これは
後に英語に訳され、『日本誌』(一七二七)の附録論文
となった。志筑忠雄が訳出したのは、『日本誌』オラ
ンダ語第二版(一七三三)の附録第六編として所収さ
れたオランダ語訳である。
- 2 拙著『鎖国』という言説—ケンペル著・志筑忠雄訳
『鎖国論』の受容史—(ミネルヴァ書房、二〇〇九年、
A5・五二四頁)。
- 3 *The History of Japan : giving an account of the ancient and*
present state and government of that empire : of its temples,
palaces, castles and other buildings : of its metals, minerals,
trees, plants, animals, birds and fishes of the chronology and
succession of the emperors, ecclesiastical and secular, of the
original descent, religions, customs, and manufactures of
the natives, and of their trade and commerce with the Dutch
and Chinese : together with a description of the Kingdom
of Siam. translated by Johann Caspar Scheuchzer, London,
1727.
- 4 『鎖国』という言説』、二六六頁。
- 5 *Amoenitatum Exoticarum politico-physico-mediarum, quibus*
continentur variae relationes, observationes et descriptiones
rerum Persicarum et ulterioris Asiae, multa attentione, in
peregrinationibus per universum Orientem. collectae ab
auctore Engelberto Kaempfero. Fasciculi V. Lemgo, 1712.
- 6 『鎖国』という言説』、一三三、五〇〇、五六頁。
- 7 訳出の底本は、シャルモ (Jacques Alexandre de Chalmot,
c. 1730-1801) によるオランダ語訳増補七冊本版
Algemeen huishoudelijk-, natuur-, zedekundig- en konst-
woordenboek. door M. Noel Chomei; vermeerderd door J. A.
de Chalmot, Lyden [Leiden], 1778. 248p.
- 8 底本は、影印版『厚生新編 静岡県立中央図書館所
蔵』(恒和出版、一九七八〜七九年)を用いた。なお、
旧字および異体字は現行通用する字体に改めた。以下
全ての引用文で同。
- 9 「厚生新編」第二五卷。
- 10 「厚生新編」第二七卷。
- 11 「厚生新編」第三四卷。
- 12 「厚生新編」第四七卷。
- 13 「厚生新編」第六九卷。

14 「厚生新編続稿」第九卷。

15 「厚生新編続稿」第三二卷。

16 「厚生新編」第二七卷。

17 「厚生新編続稿」第九卷。

18 *Flora Japonica, sistens plantas insularum iaponicarum*

secundum systema sexuale emendatum redactas ad XX

classes, ordines, genera et species cum differentiis specificis,

synonymis paucis, descriptionibus concinnis et XXXIX

iconibus adiectis. Lipsiae [Leipzig], 1784.

19 底本は、名古屋市蓬左文庫編『名古屋叢書三編』第

一九卷(名古屋市教育委員会、一九八二年)所収版を

用いた。

20 『泰西本草名疏』題言。

21 例えば、河原英吉によつて和訳出版されたヘルドリツチ

(Richard Hildreth, 1807-1865) 著『西洋奇説大日本

発見録 一名日本外交起源史』(絵入自由出版社、

一八八四年)では、ケンペルの生涯、著書ならびにそ

の内容が紹介されている。

また、拙著では取り上げなかったが、書生などの勉

強会であつた竜門社において、明治三四年(一九〇一)

一二月から翌年五月にかけて、渋沢栄一(一八四〇-

一九三一)を講師とし、歴史(「鎖国論」)を題材とし

て経済の観点から「鎖国」の是非(得失論)を考える

取り組みが行われた。

なお、その際渋沢が用いたテキストは、志筑忠雄訳

ではなく、「鎖国得失論」論者の嚆矢として知られる

福地源一郎(一八四一〜一九〇六)による抄訳であつ

た。(「近世史談」『竜門雑誌』第一六三〜一六八号、

一九〇一年二月〜一九〇二年五月)。

22 黒澤翁満編、嘉永三年(一八五〇)刊。木版、三卷三

冊。最初の二巻は志筑忠雄訳「鎖国論」の翻刻で、残

りの一巻は翁満自身の見解を述べた「刻異人恐怖伝」

である。

23 『鎖国』という言説、六三〜六四頁。

24 久米幹文編輯『教道大意導之棗』(温故堂、一八八一

年)、緒言「二」頁。

25 久米幹文編輯『教道大意導之棗』、緒言「一」頁。

26 久米幹文編輯『教道大意導之棗』、五六〜六五頁。

27 拙稿「十九世紀国学者における志筑忠雄訳『鎖国

論』の受容と平田国学」(『日本文藝研究』第五七卷一

号、二〇〇五年)、ならびに『鎖国』という言説』、

一一五〜一一七頁。

28 久米幹文編輯『教道大意導之棗』、六五頁。

29 この問題に初めて着目したのは、Wolfgang Michel:
Engelbert Kaempfers Beschäftigung mit der japanischen
Sprache. Engelbert Kaempfer -Werk und Wirkung-. Franz

- Steiner Verlag, Stuttgart, 1993, pp. 195-198. である。拙稿「エンゲルベルト・ケンペルの「神道」研究とその背景」(『九州史学』第一四二号、二〇〇五年)も併せて参照。
- 30 ヨーロッパにおけるケンペル『日本誌』の受容に着目し、初めて総体的に論じたのは、Kapiza, Peter: *Engelbert Kaempfer und die Europäische Aufklärung*. Judicium Verlag, München, 2001.
- 31 『鎖国』という言説』、三八〜四〇頁。
- 32 *Nippon: Archiv zur Beschreibung von Japan und dessen neben- und Schutzländern. Jezo mit den südlichen Kurilen, Krafto, Koorai und den Linkiu-Inseln: nach japanischen und europäischen Schriften und eigen Beobachtungen*. Bei dem Verfasser, Leyden, 1832-1851.
- 33 *Nippon: Archiv zur Beschreibung von Japan und dessen neben- und Schutzländern Jezo mit den südlichen Kurilen, Sachalin, Korea und den Linkiu-Inseln*. Hrsg. von seinen Söhnen. 2. Aufl. Verlag der K. U. K. Hofbuchhandlung von Leo Woerl, Würzburg, Leipzig, 1897.
- 34 Philipp Franz von Siebold: Über die Abstammung der Japaner. *Nippon*, 2. Aufl., pp. 281-298.
- 35 Diese Niederlassung einer chinesischen Kolonie in Japan scheint mir unzweifelhaft, und ich stimme vollständig den
- Beweisen und der Meinung Kämpfers hieüber bei. Philipp Franz von Siebold: *Nippon*, 2. Aufl., p. 284.
- 36 『鎖国』という言説』、四〇頁。
- 37 坂野徹『帝国日本と人類学者 一八八四—一九五二年』(勁草書房、二〇〇五年)、一六頁
- 38 この論説の存在は、坂野徹『帝国日本と人類学者』、九〇頁において既に紹介されている。
- 39 坪井正五郎「抜萃 日本人論集」(『人類学会報告』第二号、一八八五年)、三四頁。なお、傍線は原文に従った。
- 40 坪井正五郎「抜萃 日本人論集」、三三〜三四頁。
- 41 沼田頼輔『日本人種新論』(嵩山房蔵版、一九〇三年再版「初版も同年刊」)、一四八頁。なお、批点は原文に従った。
- 42 近世後期の状況については、拙著『鎖国』という言説』第二章および第三章参照。